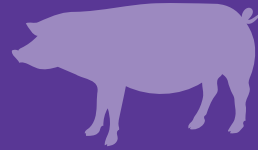


MARBOLOCK

動物用医薬品 要指示 指定 使用基準

マルボロック® 2%注 マルボフロキサシン注射液



■ 短い使用禁止期間

マルボロック2%注は、使用禁止期間が短く、使いやすい注射薬です。

[使用禁止期間]

牛：食用に供するためにと殺する前4日間
又は食用に供するために搾乳する前48時間
豚：食用に供するためにと殺する前4日間

■ 牛での静脈内投与

マルボロックは筋肉内投与(牛・豚)だけではなく、静脈内投与(牛)することができます。血管に直接投与するため、局所変性がなく、速やかに全身組織へ分布し、抗菌作用を發揮します。

■ 広い抗菌スペクトル

主成分であるマルボフロキサシンは、第一次選択薬が無効である耐性菌に対しても有効性を示します。



マルボロック 2%注
100mL ガラスバイアル

販売元

 共立製薬株式会社
東京都千代田区九段南 1-6-5

製造販売元



リケンベッツファーマ株式会社
埼玉県入間郡越生町成瀬829-6

動物用医薬品 要指示 指定 使用基準

マルボロック[®] 2%注

マルボフロキサシン注射液

【成分及び分量】

本品1mL中マルボフロキサシン 20.0mg

【効能又は効果】

有効菌種

牛:パステラ・マルトシダ、マンヘミア・ヘモリチカ、マイコプラズマ・ボビス

豚:パステラ・マルトシダ、アクチノバチルス・プルロニューモニエ

適応症

牛:細菌性肺炎

豚:胸膜肺炎

【用法及び用量】

1日1回、体重1kg当たりマルボフロキサシンとして下記の量を3~5日投与する。

牛:静脈内投与、筋肉内投与2mg(製剤として0.1mL)

豚:筋肉内投与2mg(製剤として0.1mL)

投薬開始後3日以内に治療効果を確認し、効果がみられない場合には獣医師の判断に基づき薬剤の変更等を行うこと。

(参考)



体重(kg)	投与量(mL/回)
30	3
60	6
100	10
300	30
500	50

【使用上の注意】

(基本的事項)

1. 守らなければならないこと

(一般的注意)

- ・本剤は要指示医薬品であるので獣医師等の処方箋・指示により使用すること。
- ・本剤は効能・効果において定められた適応症の治療にのみ使用すること。
- ・本剤は定められた用法・用量を厳守すること。なお、用法・用量に定められた期間以内の投与であってもそれを反復する投与は避けること。
- ・本剤は、「使用基準」の定めるところにより使用すること。

注意:本剤は、医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第83条の4の規定に基づき上記の用法及び用量を含めて使用者が遵守すべき基準が定められた動物用医薬品ですので、使用対象動物(牛及び豚)について上記の用法及び用量並びに次の使用禁止期間を遵守してください。

牛:食用に供するためにと殺する前4日間又は、食用に供するために搾乳する前48時間

豚:食用に供するためにと殺する前4日間

(取扱い及び廃棄のための注意)

- ・注射器具は滅菌又は煮沸消毒されたものを使用すること。薬剤により消毒をした器具又は他の薬剤に使用した器具は使用しないこと(ガス滅菌によるものを除く。)。なお、乾熱、高圧蒸気滅菌又は煮沸消毒等を行った場合は、室温まで冷えたものを使用すること。
- ・使用済みの容器は、地方公共団体条例等に従い処分すること。
- ・本剤を廃棄する際は、環境や水系を汚染しないように注意し、地方公共団体条例等に従い処分すること。
- ・使用済みの注射針は、針回収用の専用容器に入れること。針回収用の容器の廃棄は、産業廃棄物収集運搬業及び産業廃棄物処分量の許可を有した業者に委託すること。
- ・小児の手の届かない所に保管すること。

2. 使用に際して気を付けること

(使用者に対する注意)

- ・誤って注射された者は、直ちに医師の診察を受けること。

(牛及び豚に関する注意)

- ・本剤の使用にあたっては対象動物の状態を良く観察して慎重に投与すること。
- ・副作用が認められた場合には、速やかに獣医師の診察を受けること。
- ・筋肉内注射にあたっては、下記の点に配慮すること。
 - 1) 注射針を刺入したとき、激痛を訴えたり、血液の逆流をみた場合には直ちに針を抜き、部位を変えて注射すること。
 - 2) 本剤は一回の投与量が多い場合又は連続投与する場合は注射部位を変えること。
 - 3) 本剤は使用禁止期間を経過しても注射部位に出血痕が残存することがあるため、注射部位に配慮すること。

(取扱い上の注意)

- ・開封後は、速やかに使用すること。
- ・開封後は紙箱に戻し、直射日光を避けて保管すること。

(専門的事項)

①重要な基本的注意

- ・本剤は第一次選択薬が無効である症例に限り使用すること。
- ・本剤の使用にあたっては、耐性菌の発現等を防ぐため、原則として感受性を確認し、適応症の治療に必要な最小限の投与に止めること。
- ・筋肉内注射にあたっては、神経走行部位を避けるように注意して注射すること。

②相互作用

- ・本剤の類似化合物で非ステロイド性消炎鎮痛剤との併用により、まれに痙攣が発現するとの報告がある。

③副作用

- ・本剤は筋肉内注射により注射部位で腫脹・硬結を起こすことがある。

【貯法】室温保存、密封容器、遮光保存

